

ホタル とびたて

勝野 元子・作 小野かおる・絵



ホテルとびたて

勝野 元子・作 小野かおる・絵



太平出版社

913.6	かつ	の もと こ
	勝	野 元 子 作 ホタル とびたて 太 平 出 版 社 1979 P 110 22cm

勝野 元子 もとこ 1935年長野県に生まれる。長野県立伊那弥生ヶ丘高校を卒業。現在、辰野町に在住。主婦。伊那地方の教育誌『若い芽』に、本書の続編『新しい池』や、『萱茸きの家』『しあわせの花』などの童話を発表している。

小野かおる かおる 1930年東京に生まれる。東京芸術大学油絵科卒業。1948年にはじめて北原白秋『赤い鳥小鳥』にさしえを描いて以来、ずっと児童書のさしえのしごとで活躍している。おもな児童書の作品に、『先生のつうしんぼ』『われたたまご』『ゆびっこ』などがある。

ホタル とびたて

1979年8月10日 第1刷発行

¥960

著 者 勝 野 元 子

発 行 者 崔 容 徳

東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル
発行所

株式会社 太 平 出 版 社 ©

電話03-295-3531 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

お母さんのいないアキラに

ゆかいな友だちができました。

うまれてまもない、ホタルです。

夏の夜空にとびたつ日まで

アキラとホタルは、

ともに成長せいちょうしていきました。



ホタル とびたて もくじ

- 1 あたらしい友だち 12
- 2 ホタル見学の生徒たち^{せいと} 20
- 3 キヨシくんのおみまい 29
- 4 山のホタルたち 36
- 5 南の島^{しま}のホタルたち 46
- 6 ホタルの幼虫時代^{ようちゅうじ} 55



7 東京からきたヨウイチくん 63

8 秋の伝兵衛用水 でんべ え しょうすい 70

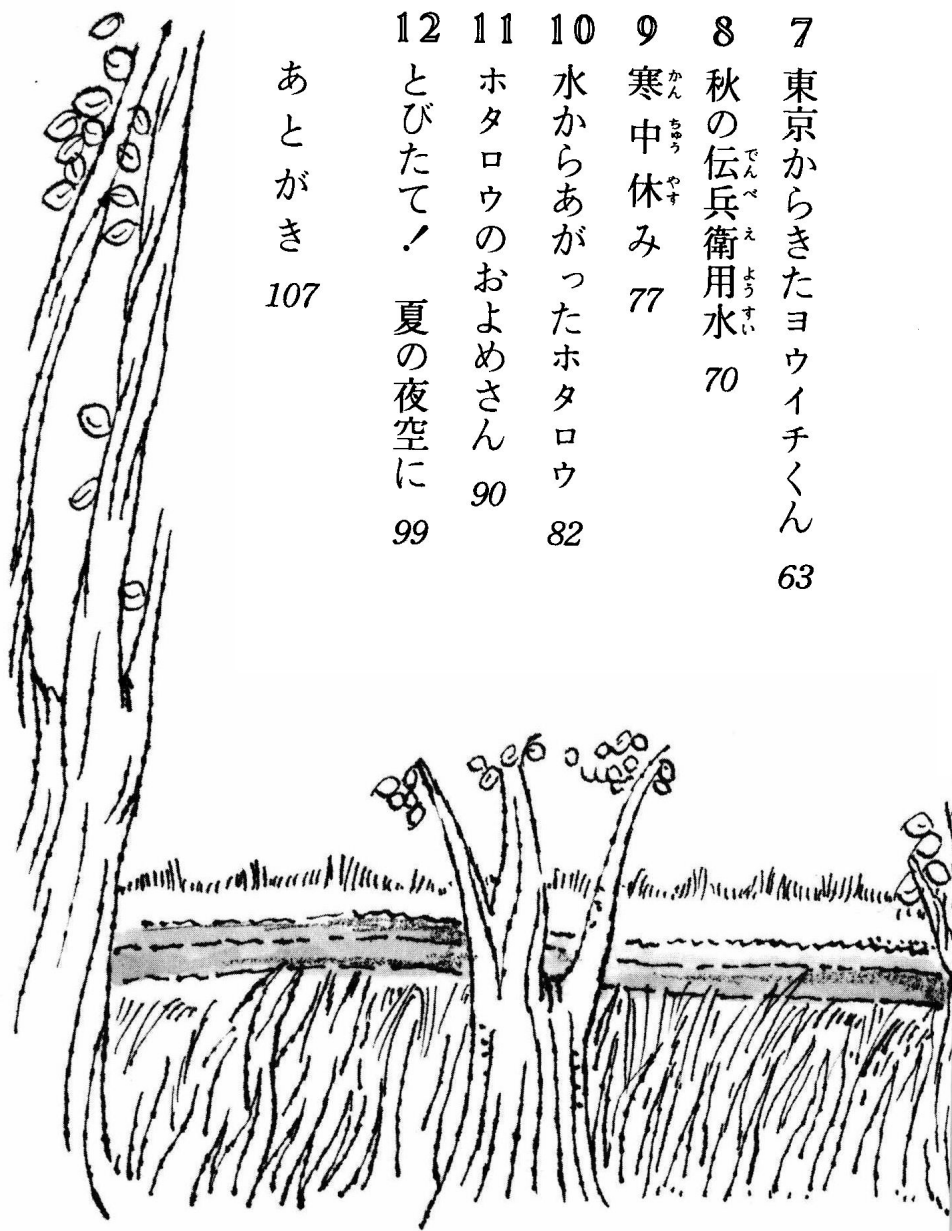
9 寒中休み かん ちゅう やす 77

10 水からあがったホタロウ 82

11 ホタロウのおよめさん 90

12 とびたて！ 夏の夜空に 99

あとがき 107



Ⅰ あたらしい友だち

長野^{ながの}県の諏訪^{すわ}湖^こから二十キロメートルほど南に、辰野^{たつの}という町があります。町の中心を、諏訪湖からはじまっている天竜川^{てんりゅうがわ}が、北から南にながれています。

むかし、伝兵衛^{でんべえ}という人が、たいへんなくろうをして、天竜川から水をひいて、用水路^{ようすいろ}をつくりました。それは、いま、伝兵衛用水^{でんべえようすい}とよばれ、土地のお百姓^{ひゃくしやう}に重宝^{きゆうほう}されています。

伝兵衛用水は、また、ゲンジボタルがたくさんいることでも知られています。

佐野^{さの}アキラは、この町にすんでいる、小学校の三年生です。いぜんは、とても活発^{かつぱつ}でしたが、お母さんがなくなってから、おとなしい子にかわってしまいました。

お父さんは、この町の高校の先生ですが、ずっとまえから、伝兵衛用水のホタルのことをしっています。

アキラも、小さいときから、両親と三人で、よく伝兵衛用水にいました。ですから、伝兵衛用水のことなら、たいていわかります。「ほたるの名所」と書いてある碑や、まがりくねった用水のわきの道など、目をつぶっていても見当がつかしました。

きょうも、アキラは、カメラを肩にかけたお父さんと、用水のわきの小道を歩いていました。山やまの雪もとけて、川岸のヤマブキの花が、雨あがりにほんのりさいています。もうすぐ四月です。

アキラは、お父さんからずっとはなれた川岸にしゃがんで、草をちぎりちぎり、水にかべていました。夕ぐれのうす明かりのなかで、草は、つぎつぎにながれていきます。なんだか、さびしくなって、

「お母さん……。」

と、思わずつぶやきました。

「アキラさん。」

ふと、だれかに小声でよばれたような気がしました。

「アキラさん。」

もういちど、たしかにきこえます。

「だれ？　ぼくをよんでいるのは。」

「わたしです。ホタルのホタロウ。」

おわりのほうは、ふしをつけてうたうような声でした。

アキラは、すっかりおどろいてしまいました。

「いったい、どこにいるの？」

「ほら、川のなかに白い石があるでしょう。その下ですよ。」

アキラは、水中の白い石を、そっとどけてみました。すると、いました。お父さんの「ホタルのへや」といつている研究室けんきゅうしつにいるような、ゲンジボタルの幼虫ようちゅうが一匹ひき、いました。アキラが、つまんで手のひらにのせると、クルリとまるまりました。

「アキラさん、わたしとお友だちになりました。」

アキラは、びっくりするばかりです。

「きみは、話ができるの？」

「そうです。でも、アキラさんとだけです。だれにも、いってはだめですよ。男と男の約束やくそくですから。」

ホタロウがおおまじめにいうので、アキラは、わらいだしてしまいました。



「ほらほら、あんまりわらうと、あっちのお父さんがびっくりしますよ。」

けれども、お父さんは、カメラをすえて思案顔です。こちらのことは、気がつきそうにもありません。

ホタロウは、いいました。

「アキラさん。わたしたちホタルは、生まれたときから、お父さんもお母さんも知りません。人間の子どもはいいですね。」

ゲンゴロウのおじさんからききましたけど、わたしのお父さんはハンサムで、お母さんもなかなかすてきなホタルだったんですって。わたしがタマゴからかえったころは、もう、いなかったんですが、『子どもたちによろしく。つよいホタルになるように。』と、ゲンゴロウのおじさんに、ことづてをたのんだそうです。」

アキラは、ホタルが、成虫せいちゅうになって二週間しゅうかんくらいで死んでしまうことを知っていました。でも、ホタロウから、「わたしたちは、生まれたときから、お父さんもお母さんも知りません。」といわれて、はっとしました。

「だけど、お父さんやお母さんは、わたしの心のなかにいます。アキラさんには、あんなにいいお父さんがいらっしゃるじゃありませんか。そんなにしょんぼりしないで。さ

あ、元気をだして。」

ホタロウは、一生けんめいに、アキラをはげましてくれました。

「ありがとう。ぼく、元気をだすよ。」

「ああ、よかった。ぼつぼつ、水のなかにもどしてください。あんまりながく水からでているのは、にがてです。また、おあいしましょう。いつも、この白い石をめじるしにして、なるべく小さな声で、『ホタロウ』とよんでくださいね。」

アキラは、ホタロウをそつと、もとのところにもどしました。

いつのまにか、あたりは、うすぐらくなっていました。目をこらすと、川べりの草むらに、てんとんと、宝石ほうせきのように青く光るものがみえます。水中生活すいかくをおえたホタルの幼虫ようちゅうが、サナギになるために、川からあがってきているのです。

カメラを肩かたにかけたお父さんが、アキラのそばにきました。

「ごらん、アキラ。いつみても、うつくしいね。お父さんは、毎年まいとし、この光をみつけたびに、ほんとうにうれしくなるんだよ。」

「ほんと。つゆの玉より、きれい。」

雨あがりの草むらで、つゆがキラキラしています。そのなかで、ホタルの幼虫は、エ

メラルド色にいつそう光っています。

ゲンジボタルや、ヘイケボタルは、水のなかで、ながい幼虫時代をすごします。春さきになると、思い思いに川べりによってきて、そとのようなすをみます。雨で土がしめつて、やわらかくなるときをまっているのです。

毎年、お父さんは、伝兵衛用水からあがるホタルの幼虫のかずをしらべています。さいきんは、諏訪湖や天竜川のごれがひどくなつたため、ホタルも、めつきりへつてしまいました。

四月になると、一か月あまり、毎晩ここへかよいます。ホタルの幼虫たちがあがつてくるのを、しんぼうづよくまつのです。

ホタルのなかでも、おっちょこちょいのホタルは、雨がぱらつくと、ろくにたしかめもしないで、すぐに川からあがつてきます。お父さんのかよいはじめに、ひとつ、ふたつ、目にとまるのは、きつと、そんな幼虫たちでしょう。

大部分の用心ぶかいホタルたちは、じゅうぶんに、雨をたしかめると、光りながら、川岸をソロソロとあがつてきます。

そして、その夜のうちに、土にもぐりこみます。そこで、何週間もかけて土マユをつ

くり、そのなかでサナギになるのです。

お父さんは、よく、ホタルを写真にとります。そんなとき、アキラは、助手をつとめます。ライトをあてたり、サナギをのせたガラスの板をうごかしたりするのです。

サナギが、いやいやというようにそりかえってしまったりすると、お父さんが、

「おいおい、きげんをなおしておくれ。すぐにすむから。そうそう、そのちょうし。」
などというので、アキラは、おかしくてたまりません。

でも、ホタロウと友だちになってからは、

「お父さんは、ホタルがかわいいから、ホタルのきもちがわかるのかな。」
と、思うようになりました。

けれど、ホタロウとは、かたい約束があります。いくら、お父さんだからといって、ホタルの友だちのことを、話すわけにはいかなかったです。

② ホタル見学の生徒たち

あの晩から、アキラには、あたらしい友だちができました。けれども、人間よりずっと一生のみじかいホタルですから、ホタロウも、すぐにとんでいってしまうのではないかと心配でした。

ある夜、アキラは、伝兵衛用水にでかけました。

めじるしの白い石のあたりで、小さな声でよびました。

「ホタロウ、ホタロウ。」

……。

返事がありません。アキラは、ドキドキしてきました。やっぱり、ホタロウも川からあがって、土のなかにもぐってしまったのかなと、がっかりしてしまいました。

「ホタロウ、ホタロウ……。」

「アキラさん、どうしたんです？」

しばらくして、ホタロウののんびりした声がしました。

「さっきから、よんでいたんだよ。」

「それは、すみません。ゲンゴロウのおじさんと話しこんでいたもんですから。」

ホタロウがちゃんといるので、アキラは、ホッとしました。知らないまにいらなくなっ
たんじゃないかと、心配しておこっていたじぶんが、なんだかきまり悪くなりました。

「いつ、陸にあがるの？ この夏、もう、とんでいっちゃう？」

「いいえ。わたしは、来年まで、おとなになれません。だから、お友だちになったんで
すよ。」

アキラは、やっと安心しました。すっかりうれしくなって、いきこんでいました。

「ああ、よかった。じゃあ、これから、ぼくのうちにこない？」

「な、なんですって。わたしが、アキラさんのところへ？」

「そう。あした、うちにクラスみんながくるんだ。お父さんがホタルのことを研究し
てるから、ホタルの勉強にね。だから、ホタロウにも、きてもらいたいんだ。」

「でも、どうやって、いくんですか？」



「だいじょうぶ。」

じしんたっぷりにいうと、アキラは、あたりをキョロキョロみまわして、かけた茶^{ちや}わんをひろいました。

「いいかい。ちよつと、きゅうくつだけど、このなかにはいってあげたいよ。」

「じゃ、おべんとうもいれてくださいね。」

「ああ、カワニナのこと？ ホタロウも、ぼくとおんなじ食^くいしんぼうだね。」

マキガイのカワニナは、ホタロウたちの食^たべものなのです。

うちにつくと、ホタロウを牛乳^{ぎゅうにゅう}びんにうつしかえて、「ホタルのへや」にもっていきました。ここには、エアポンプのついた水槽^{すいそう}が二十もならんでいて、ホタロウのよ